

図画工作科における 創造的に自らの思いを広げ表す児童の育成 —— 「環境づくり」に着目した教科経営を通して ——

長期研修員 藤崎 敬太郎

《研究の概要》

本研究は、図画工作科の学習指導において、創造的に自らの思いを広げ表す児童の育成を目指したものである。

小学校において、図画工作科の学習指導に難しさを感じている教師は多い。そこで本研究では、学校全体の授業改善ができるように、図画工作科の教科経営を行う。具体的には継続的に取り組むための体制づくりと、授業改善の視点の提案を行う。題材に「環境づくり」の視点を取り入れ、図画工作科担当教師と共に話し合い、授業を行っていくことで、児童の多様性を大切にし、自己決定を促す指導ができるようになることを提案する。このような教科経営が、児童が創造的に自らの思いを広げ表すことに有効であることを、授業実践を通して明らかにした。

キーワード 【図画工作科 創造 環境づくり 教科経営 授業改善】

群馬県総合教育センター

分類記号：G05-07 令和3年度 276集

I 主題設定の理由

図画工作科の目標においては「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力の育成を一層重視する」としている。一人一人の多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される今、様々なものとの関わりの中で、楽しく豊かに「創造」することは、図画工作科の造形的な創造活動の本質として、大切にしたいことである。学校では、それぞれの児童が自分なりの見方や表し方を工夫できる授業が、前述の資質・能力の育成につながると考える。

群馬県教育委員会の「令和3年度学校教育の指針」では、図画工作科・美術科の学びを深める授業改善のポイントとして「自分の表したいこと・主題に合わせて表し方を試したり、作品などを見合ったりして、考えたことを交流できる環境づくりをすること」の大切さを挙げている。

文部科学省による「平成30年度教員免許状授与件数等調査結果」によると、中学校の教科別の普通免許状授与件数において「美術」は、「保健」「技術」「家庭科」に次いで少ない。つまり、小学校における図画工作科教育においても、専門的な知識をもつ教員が少数という現状がある。県内の図画工作科を指導している教師20名へのアンケート調査では、図画工作科指導の難しさについての項目において、「技能を高める指導」「水彩絵の具の使い方」「技法の知識」など、技能に関する内容が多く挙げられた。つまり教師は、「描き方、作り方」の指導に重点を置いているのである。このことにより、これまでの図画工作科教育において、多くの教師によって上手な絵を描かせる指導、画一的な描画法の教え込みが行われてきたと推測できる。その結果、「アイデアが浮かばない」「自分なりに表現できない」という、児童の苦手意識が姿として表れていると考える。

研究協力校（以下、協力校）の児童は、図画工作科の学習に対して興味・関心が高く、学習に意欲的に取り組んでいる。しかし、題材や材料、表現方法などとの出会い、自らの思いや願いを膨らませて、表したいことや主題を生み出すことに難しさを感じている児童は多い。また、主体的に他者と対話しながら、表現の工夫を追求するような活動体験が少ない実態がある。

協力校の教師の実態を見ると、図画工作科の研究授業の実施経験や参観経験は少ないという現状がある。さらに、教職経験が豊富であっても、図画工作科の指導に苦手意識を抱いている教師は多い。一つの型や方法に固執し、児童が自己決定する場が少ない指導や、特定の表現のための表し方を身に付けるような偏った指導によって、児童の主体性や創造性を育むものになっていないことが課題として見られる。このことから、小学校の図画工作科教育における教師の課題について、学校全体の授業改善が必要であると考えた。そこで、図工部会などの既存の体制を生かしながら継続的に授業改善をしていくためには、図画工作科の教科経営の在り方を見直すことが有効であると考えた。

また本研究では、前述の「環境づくり」に着目した。「環境づくり」は、教師が授業に導入しやすく教師主導の授業から児童主体の授業に変わる効果が期待できる手立てである。しかし、アンケート調査によると、その「環境づくり」を意図的に行っている教師の割合は僅か15%に留まり、あまり「環境づくり」を行っていないという実態が明らかになった。表したいことや主題を更新したり、具体化したりすることができる「環境づくり」は、児童の主体的・対話的で深い学びにつながると考える。このことによって、教師は児童の多様性を大切にし、自己決定の場面を促す指導のよさを実感することができる。と考える。

そこで本研究では、児童が創造的に自らの思いを広げ表すことができるよう、「環境づくり」に着目した教科経営を行う。教科経営によって学校全体の図画工作科担当教師（担当教師）の授業改善を促すことで、その有効性について検証する。

以上のことより、図画工作科の学習指導において、創造的に自らの思いを広げ表す児童を育成するために、「環境づくり」に着目した教科経営を行うことの有効性を明らかにしたいと考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

図画工作科の学習指導において、創造的に自らの思いを広げ表す児童を育成するために、「環境づくり」に着目した教科経営を行うことの有効性を明らかにする。

III 研究仮説（見通し）

図画工作科の学習指導における「環境づくり」に着目した教科経営を通して、図画工作科担当教師の授業改善が促され、創造的に自らの思いを広げ表す児童を育成することができるであろう。

IV 研究の内容

1 文言の定義

(1) 「創造的に自らの思いを広げ表す」とは

児童は、材料や対象から、自ら感じたことや考えたことを大切にして、形や色、イメージなどに自分なりのよさや美しさを見いだすことができる。個々の児童のもつ見方、形や色の表し方の工夫は多様である。児童一人一人が、自分なりの工夫を十分に発揮しながら、主体的に活動や表現をすることを「創造的に自らの思いを広げ表す」とする。

(2) 「『環境づくり』に着目した教科経営」とは

本研究における図画工作科の教科経営とは、継続して授業改善できる図工部会や、全学年で使える材料・用具の整備などの「体制づくり」を行うことと、授業改善の視点を提案することである。その授業改善の視点として、「環境づくり」に着目する。教師主導の指導は、児童が創造的に自らの思いを広げ表すことにつながりにくい。そこで教師ができることは、意図的な「環境づくり」によって、児童の多様性を大切にし、自己決定を促すことである。

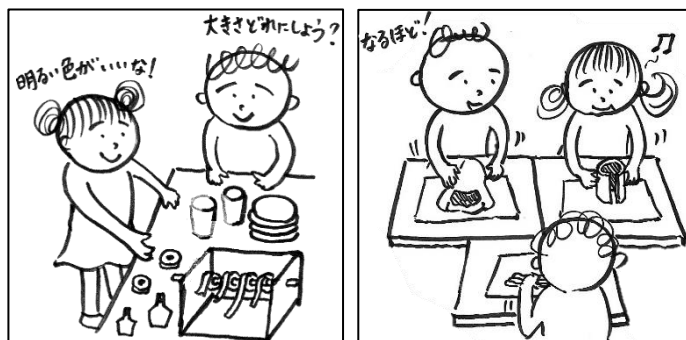


図1 材料・用具の設定 図2 場の設定

「環境づくり」とは、児童の主体的・対話的な学びを促す、材料・用具や場を設定することである。具体的には、児童の学習活動を想定し、児童の自己決定や、自然な対話を促すような、材料・用具や場の設定をする。例えば、教室に材料・用具コーナーを設置することで、児童が必要な時に必要なものを取りに行ったり、選んだりすることができる場面が生まれ、個々の自己決定を促すことができる（図1）。また、机を向かい合わせの配置にする場の設定により、友達の活動の様子や作品が見やすくなるので、自然な対話を促すことができる（図2）。

「環境づくり」に着目した教科経営によって、児童が自分なりに気付いたり、見付けたりすることを促し、創造的に自らの思いを広げ表す児童の育成につなげたい。

(3) 「かんきょう手帖」とは（次ページ図3）

「環境づくり」の視点を取り入れた、題材の学習指導案の概要版である。題材の中に、「目標」「学習活動」「環境づくり（図）」「目指す児童の姿（イラスト）」「環境に促された姿」を示したものであり、担当教師に提案したり、担当教師と一緒に内容を考えたりする。授業の仕方について、簡潔に分かりやすく提案していくために、イラスト入りで表した資料である。この資料を全学年の職員へ配付することで「環境づくり」について提案し、図画工作科主任として「環境づくり」に着目した教科経営を行う。

「かんきょう手帖」

目標

学習活動

目指す児童の姿

「環境づくり」の視点を
取り入れた学習指導案
の概要版

かんきょう手帖 しんぶんしとなかよし 2年
1時間

●目標
新聞紙の感触を体全体で味わいながら、思い思いの形をつくることを、楽しむ。

●学習の流れ

である	大くさんの新聞紙に出会う。 新聞紙を折ったり、まわったり、丸めたり、切り取りながら、紙の大きさや感触などを全身で味わう。 新聞紙の感触を味わいながら、思い思いの形をつくる。
ひらがる	さらに思い思いの形を直し、友達と協力していろいろな形を捏ね、其につくりがたさを楽しむ。
あはれず	みんなでつくった形や面白いな様子を共有し、面白さについて伝え合う。

●「環境づくり」

大衆の新聞紙を利用すること
で、思い思いの形をつくる
ことができる。

児童の姿・環境づくり
に詳しく、児童の多
様な姿を自ら観察す
ることができる。

●目指す児童の姿

- 新聞紙を折ったり、まわったり、できた形を見せ合ったりしながら、いろいろな形に気付いている。思い思いの形をつくり出した新聞紙に気配られた感に気付いている。(図1)
- テープで新聞紙をつないで大きな面にしたり、丸めて思い思いの形にしたり、切取ったり折ったりするなどの、身体全体を使った活動を楽しんでいる。(図2)
- 教室の壁を利用して新聞紙に貼り付けて空に風船となり、新聞紙を折り紙のように折っていくことを思い思いにしている。どのように活動するかについて考えている。(図3)
- 思い思いの形にしたいで自由な発想を掛け合ったり、新聞紙をものに感じさせてその形に入ったりしながら、面白さや楽しさを感じ取っている。(図4)
- 新聞紙に貼ったり、巻いたりしながら、いろいろな形にしながら活動を楽しもうとしている。(図5)

題材名
領域
時数
学年

環境づくり
(図)

環境に
促された姿
(イラスト)

図3 「かんきょう手帖」について

2 手立ての説明

児童が創造的に自らの思いを広げ表すためには、教師が児童の多様性を大切にし、自己決定を促す指導をしていくことが大切と考える。担当教師がそのような図画工作科の指導の考え方を共有し、学校全体の授業改善ができるよう、本研究においては「環境づくり」に着目した教科経営として、「体制づくり」と、授業改善の視点である「環境づくり」の提案を行う。

計画立案の段階では、図工部会を設定し、継続的に学校全体の授業改善ができる、人的な「体制づくり」を行う。また、授業で必要となる材料や用具なども、物的な「体制づくり」として整備をしていく。さらに、授業改善の視点である「環境づくり」を提案するために、「かんきょう手帖」を作成する。その「かんきょう手帖」を活用しながら、担当教師と授業について話し合う機会を継続的にもつことで、図画工作科の授業改善をしていきたいと考える。

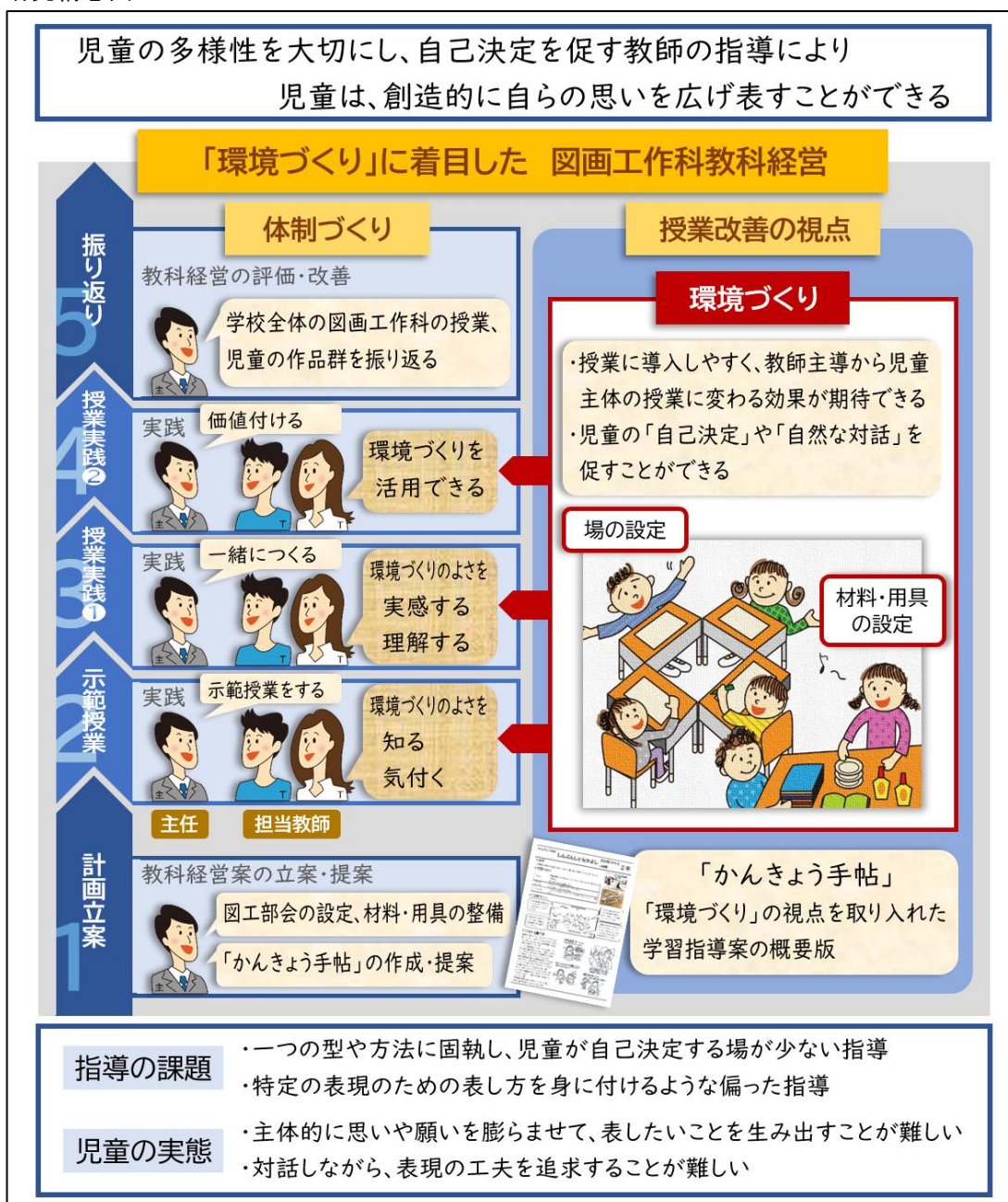
実践では、1学期に図画工作科主任教師による示範授業を行い、参観によって児童の多様性を大切にしたい指導例を知り、「環境づくり」のよさに気付く機会となるようにする。2学期前半には、「環境づくり」を視点とした話合いの後に、担当教師による授業実践を行い、「環境づくり」のよさや、その手立てによって表れる児童の主体的・対話的な学びの姿を実感し、理解できるようにしたいと考える。そして2学期後半には、担当教師が自ら「環境づくり」について考えることで、自分で活用できるようになることを目指す。この過程における話合いを通して、児童の多様性を大切にし、自己決定を促す指導ができるように、授業改善をしていきたいと考える。授業の中で、児童が体験的活動を通して学びを深めることができるように、教師も自らの授業実践を通して、そうした考え方を実感できると考える。

振り返りにおいては、図画工作科の教科経営についての評価・改善を行う。具体的には、学校全体の授業改善ができたか、また児童は、創造的に自らの思いを広げて表し、作品群の中に表現の工夫が見られたかを振り返る。

「環境づくり」は、授業中の児童の自己決定や、自然な対話を促すことができる手立てであると考えられる。本研究における「自然な対話」とは、児童の必要感に応じた自然発生的な対話のことである。例えば、児童が悩んだときに相手と話をすることで解決したり、自分の思いを言葉にすることで見通しや課題を明確にしたり、自他の活動や作品について話をすることで、新たな発想が生まれたりするような対話である。

以上より、「環境づくり」に着目した教科経営の有効性を明らかにするために、授業実践や図画工作科担当教員からの聞き取り及びアンケート調査、児童の活動の様子及び作品などを通して、研究の検証を行う。

3 研究構想図



V 実践の計画と方法

1 実践の概要

提案・調査・実践	時期	方法
1 計画立案 アンケート調査による実態調査	年度始め～	教科経営案の立案・提案 ・図工部会の設定、材料・用具の整備 ・「かんきょう手帖」の作成・提案 協力校で実施
2 示範授業	7月	協力校で図画工作科主任が実践
3 授業実践①	9月～11月	協力校で図画工作科担当教師が実践
4 授業実践②	11月～12月	協力校で図画工作科担当教師が実践
5 振り返り アンケート調査による検証	～年度末	教科経営の評価・改善 協力校で実施

2 検証計画

検証の視点	検証の方法
図画工作科の学習指導において、「環境づくり」に着目した教科経営を通して、図画工作科担当教師の授業改善が促され、児童は創造的に自らの思いを広げ表すことができたか。	・図画工作科担当教師からの聞き取り及び、アンケート調査 ・児童の活動の様子及び作品

VI 研究の結果と考察

1 計画立案 ※年度始め～

(1) 人的・物的な「体制づくり」の実施

図工部会を設定し、継続的に学校全体の授業改善ができる、人的な「体制づくり」を行った。また、授業で必要となる材料や用具なども、物的な「体制づくり」として整備をしていった。

(2) 授業改善の視点「環境づくり」の提案

授業改善の視点である「環境づくり」を提案するために、「かんきょう手帖」を作成した。その「かんきょう手帖」を活用しながら、担当教師と授業について話し合う機会を継続的にもつことで学校全体の図画工作科の授業改善をしていくことを計画した。

2 示範授業 ※図画工作科主任（長期研修員）が協力校で実施

(1) 事前

題材に「環境づくり」の視点を取り入れた「かんきょう手帖」を作成し、指導案と共に提案した。協力校の教師に、示範授業前に配付した。また授業後の授業研究会を設定した。材料の新聞紙については、十分な量を用意するために、事前に全学年の保護者に提供の協力を呼び掛けた。新聞紙を取っていない家庭も多いため、校内に新聞紙の保管場所を決めることで、学年、授業問わずに誰でも活用できるような、物的な体制を整えた（図4）。



図4 物的な「体制づくり」

(2) 実践（第2学年「しんぶんしとなかよし」）

担当教師を中心に、10名が示範授業を参観した（図5）。大量の新聞紙を敷き詰めた場の設定、机・椅子の撤去、材料・用具コーナーの設置などの、「環境づくり」がされた中で児童一人一人が自分でつくりたいものを考えたり、つくったり、友達と協力したり、遊んだりする様子が見られた。悩んだり、試行錯誤したりした時には、周囲の友達の活動やつくったものを見たり、対話したりすることで解決し、児童が主体的に取り組む姿を促す「環境づくり」について、担当教師が知り、共有することができた。



図5 示範授業の参観の様子

(3) 事後

「環境づくり」によって促された児童の姿を視点を担当教師と共に授業の振り返りを行った。担当教師が「子供たちはそれぞれ、自分の好きな表し方の工夫を見付けて意欲的につくっていた」と言ったことから、「環境づくり」によって児童の主体的な姿を促せることに気付く様子が見られた(図6)。

実践後には「かんきょう手帖」に「学びの中で見られた児童の姿」を加筆し、校内の教師へ配付した。



図6 授業後の振り返りの様子

3 授業実践① ※担当教師が協力校で実施

(1) 事前

2学期の題材について、担当教師と話し合った。2学期は、全学年において物語を基に想像を広げて絵に表す活動を計画しており、物語の内容や手立てとして考えられる「環境づくり」について一緒に検討した。またその他の題材についても、各学年の教師と話し合い、一緒に授業づくりを行った(図7・表1)。

授業実践①では、図画工作科主任が題材に合わせて「かんきょう手帖」を作成し、それを基に児童の主体性を促す手立てについて話し合いを行った。



図7 2学期題材の話し合いの様子

表1 2学期の実践に係る題材

学年	授業実践①の題材	授業実践②の題材
1	おはなしからうまれたよ (絵) はこでつくったよ (立体)	かみざらコロコロ (工作)
2	おもいでをかたちに (立体) ことばのかたち (絵)	音づくりフレンズ (工作)
3	ことばから形・色 (絵)	空きようきのへんしん (工作)
4	立ち上がれ!ねん土 (立体) 言葉から形・色 (絵)	ギコギコクリエイター (工作)
5	言葉から思いを広げて (絵)	まだ見ぬ世界 (絵)
6	言葉から想像を広げて (絵)	すてきな明かり (工作)

題材「言葉から想像を広げて」の学習において「百羽のツル」の読書感想画の実践を行うために、「かんきょう手帖」を基に担当教師と話し合いを行った(図8・次ページ図9)。児童一人一人の思いを実現しやすい用紙を検討し、白いマーメイド紙を基底材として準備した。また、資料コーナーに設置する絵本や参考作品について、話し合いを行った。担当教師は事後、「この時は自分が指導することばかり考えており、環境づくりまで気が回っていなかった。効果が分かれば実践してみたいという程度であった」と話していたことから、手立てとしての「環境づくり」についての理解がまだ浅かったと考える。



図8 担当教師との話し合いの様子

●目標

言葉から思い浮かんだイメージを基に、自分なりの表し方を考え、工夫して絵に表す。

●学習の流れ

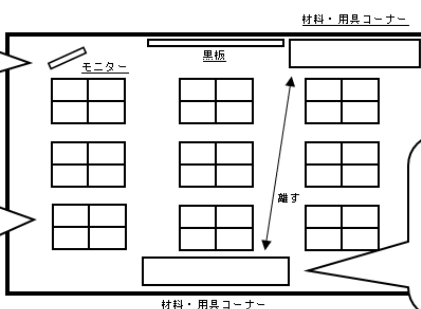
であう	物語からイメージを広げる。 言葉を味わい、感じたことや思い浮かんだことをアイデアスケッチにする。
ひろがる あらわす	表したいイメージが伝わるように、表し方を工夫して絵に表す。 自分の思いに合わせて、全体の構成や表し方などを追求していく。
ふりかえる	自分や友達の商品を見て、表したかったイメージや工夫を伝え合い、よさを味わう。



●「環境づくり」

撮影した活動の様子や作品を、モニターやタブレット端末を通して見合うことで、さらに発想や工夫が広がる

複数人で向き合っかく場を設定することで、児童が互いの表現を見渡して参考にできる。



試しがきのための紙置き場や、かいている途中の絵を置いて眺める場を、壁際に離して配置することで、児童の視線や動きが自然と交流できる。

モダンテクニックの用具や表現例を準備し、必要に応じて使えるようにしておくことで、児童の気付きを促したり、児童が表したいイメージに合わせて表現を工夫したりできる。

●目指す児童の姿

- ・動き、奥行き、バランス、色の鮮やかさなどを理解して、表現している。(知)
- ・パスを指でこすって工夫して表現したり、イメージに合わせて描画材を選んだりしている。(技)
- ・あたり前に助け合うあたたかい姿を表現しようと、一番後ろを飛んでいた子供のツルの目に、助けてくれた仲間たちが映るように表現するなど、表し方を考えている。(発)
- ・鑑賞の時間に友達の表現のよさや工夫に気付いたり、同じ言葉からでも感じ方や表し方が違うことを捉えたりして、自分の見方や感じ方を深めている。(鑑)
- ・自分のイメージに合わせて主体的に表そうとしている。(態)



図9 「かんきょう手帖」(授業実践①「言葉から想像を広げて」)

(2) 実践(第6学年「言葉から想像を広げて」)

題材の導入場面において、担当教師は絵本を使わず物語を言葉だけで読み聞かせを行った(図10)。児童は、文字だけの学習プリントを目で追いながら静かに教師の言葉に耳を傾けていた。児童がそれぞれ想像した思いやイメージを大切に、言葉やスケッチで表したり、そのことを交流したりする活動を行った。物語から児童は、「あたたかい」「くらい」「かっこいい」「夜だけれど明るい」など、様々なイメージを言葉にしていたことから、言葉だけで想像を膨らませることによって、児童は自分なりの思いを広げることができたと考える。



図10 導入における指導の様子

物語からイメージを広げてスケッチをする場面において、一人一台の ICT端末を準備し、児童が必要に応じて使える「環境づくり」を行った(図11)。本物のツールを目にしたことがない児童は多く、ICT端末で参考のできる写真や絵、文字などによる情報を集め、スケッチに生かすなど、自分に必要な情報を主体的に調べる児童の姿から、教師自らが写真資料などを選んで準備するよりも、よりそれぞれの児童が欲しいと考える資料を見付け出し、活用できることに担当教師は気付いた。



図11 自分で情報を集める姿

活動中は、児童がいつでも友達と互いに作品を見合えることを許容する場づくりを行った。感染症対策の視点から、席の配置が変えられない時期が実践の期間と重なった時には、近くの児童と互いに見合ったり、自由に席を移動したりすることでスケッチを見せ合える場を設定した(図12)。児童は直接相手と話をせず、作品を互いに見合うだけでも、鑑賞を通して相手と対話をする事ができた。児童がそこで感じたことを自分の作品に生かしていく姿から、対話によって自分の表し方を広げることができることに、担当教師は気付いた。



図12 対話しながらスケッチする姿

また、スケッチが用紙に入りきらなくなってしまった児童が、友達の助けを借りて新しい用紙をテープでつなぎ合わせて描ける範囲を広くする様子が見られた(図13)。自他の表現に直接的に関わる対話だけではなく、学習活動上の課題を解決するために、このように協力して活動する姿も見られた。製作中においても自由に友達と対話できる環境において、自分の思いを明確にしたり、友達と協力したりする活動ができたと考ええる。



図13 友達と協力して活動する姿

教室に、絵本の挿絵などの「資料コーナー」をつくり、児童が必要な情報を見つけて活用できるようにした。絵本の挿絵は、形、色、表し方の工夫が様々であり、写実的な表現のものから、単純化したもの、デザイン的なもの、部分を強調したものなど多種多様である。児童が表し方を思い付かないときや、自分の表したいイメージに近いものを参考にしたいときなど、必要感を感じたときに鑑賞することができた(図14)。このことから、一人で資料コーナーに来て表現の方向性を見付けたり、一緒に見ている児童同士で対話したりしながら、児童は自分の考えを明確にしていくことができることに、担当教師は気付いた。



図14 資料コーナーでの児童の姿

児童がスケッチを進めている場面において、担当教師と打ち合わせを行った。担当教師は、児童が他者と対話したり、絵本の挿絵やタブレットの情報などを活用したりしながら、自らの思いを広げてスケッチに取

り組む様子を見たことで、「初めのころは、児童が上手に書けるようにツルの描き方を教えたい、という気持ちが強かった。けれども児童は自分たちの力で様々な発想を広げ、自分で表したい表現の方向性を見付けていた」と話していた。このことから、児童が様々な場面において、自己決定できる「環境づくり」を行ってきたことが、主体的に学ぶ姿に繋がっていることを実感している様子が見られた（図15）。



図15 実践①の打ち合わせの様子

彩色の場面では、水を多めに使いながら、絵の具をぼかしながら彩色する児童、筆跡が残るように絵の具を用紙の上に置いていく児童、水を少なめにしてみたら残らないように彩色をする児童など、自分なりに選んだ表現を追求する姿が見られた。また絵の具を用紙の上で勢いよく垂らすことで、色の点々を表現していた児童がおり、それを見た友達が同じような表現に挑戦している様子が見られた。これは作品づくりをしながら、友達の作品を鑑賞することで、自分の表現の幅を広げている姿であった。題材の導入場面から、作品や技法などの多様な表現のよさを鑑賞しながら製作できる「環境づくり」をしてきたことが、児童の多様な表現の工夫に生かされたことを、担当教師は実感していた（図16）。

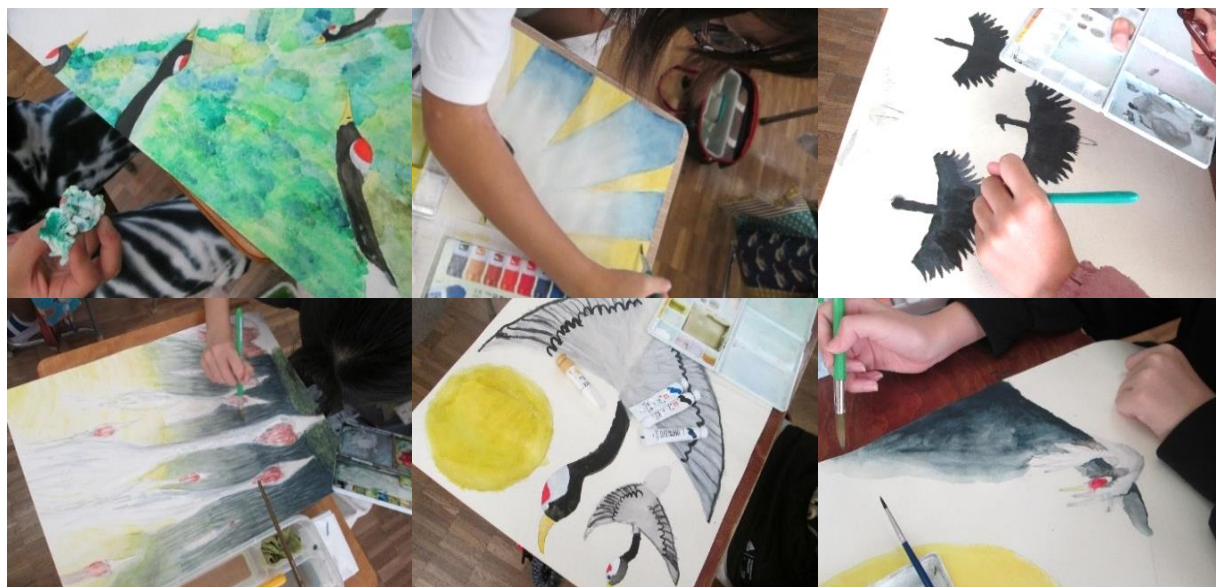


図16 多様に児童が表し方を工夫する姿

製作の終盤には、クレヨン、パス、コンテなどの描画材のある「材料コーナー」を設置した。児童が新たな描画方法を試しながら、自分が表したいことに合う表現を見付けて作品への生かし方を考える様子が見られた（図17）。一度は完成作品と考えていた児童が、もう一度作品を見直したり、思い付いたことを描き足したりするきっかけとしている姿が見られた。材料、用具、参考作品などを提示する場については序盤・中盤・終盤の製作段階における児童の表現したいことに応じて、児童が使いたいときに使えるように設定したことが、このように児童の自己決定を促すことを担当教師は実感していた。



図17 材料コーナーでの児童の様子

(3) 事後

「環境づくり」をしたことで、想定していた児童の姿がたくさん表れた。担当教師は「これまでは、児童が自分の席で黙々と製作できることがよいと考えていたが、対話を通して主体的に課題を解決している姿を見て、考え方が変わった」と話していた。また、事前に材料や資料、参考作品を準備して製作環境を整えた分、1学期のころと比べて授業中の教師の発話量や板書の量が最低限に抑えられ、児童主体の授業に変わってきたことを担当教師が理解していた（図18）。



図18 実践①の振り返りの様子

4 授業実践② ※担当教師が協力校で実施

(1) 事前

2学期後半の題材の内容について、担当教師と授業について話し合った。授業実践②では、担当教師が主となり、「環境づくり」について考えた。児童の主体的な活動を想定して、「机の配置」「材料コーナー」「試しの場」をどのように設定するか考えることができた（図19）。



図19 実践②の打ち合わせの様子

(2) 実践（第6学年「すてきな明かり」）

ランプシェードを製作する題材「すてきな明かり」の導入場面では、本題材で使用する材料のプラスチック段ボールの大きなシートを組み合わせたオブジェと出会う場面を担当教師が設定した（図20）。暗い部屋で懐中電灯を使って照らすことで、素材の透過性を感じたり、実際に触ってみたりしながら、児童は素材の特性を理解していた。いつもの教室とは違う環境において、嬉しそうにオブジェに触れる様子から、児童の製作への意欲の高まりが感じられた。



図20 導入で材料と関わる様子

机の配置を向かい合わせにして5人程度のグループで製作できる場を設定した（図21）。児童同士で互いに様子を見合ったり、一人ではつくりづらい部分を友達と協力したりしながら、活動を行うことができた。授業後に児童は、「悩んでいた時に、友達と協力したり相談したりしながらつくることで解決できた」と話していた。このことから、児童は対話を通して、課題を解決しながら製作することができたと考える。



図21 対話を促す机の配置

プラスチック段ボール、カラーセロハン、お花紙、黒面用紙の材料が並べられた材料コーナーを設置し、児童が必要な材料を必要なタイミングで使うことができる「環境づくり」を行った。鉛筆でアイデアを描いて発想を膨らませたい児童のためには、スケッチができる用紙を準備した。また、暗い場所でランプシェードの光り具合が分かるように、光の透過を確認できる試しの場を設置した。児童は表したい思いが実現できるよう、様々な活動を選んで取り組んでいた。児童が自己決定できる場面を促すよう、事前に多くのことが準備されており、「環境づくり」を取り入れた児童主体の授業となっていた。

(3) 事後

担当教師は「児童に解決方法を直接伝えるのではなく、アイデアとなるものを準備し、児童の気付きを促していきたい」と話していた。授業実践を通して児童の主体的・対話的に学ぶ姿につながる「環境づくり」を活用することができたと考える。児童の表現の多様性を大切にし、自己決定の場面を促す指導ができるようになったと考える（図22）。



図22 実践②の振り返りの様子

(4) 他学年の実践の様子

第1～第5学年においても「かんきょう手帖」を基に、図画工作科の授業の「環境づくり」について話し合い、授業実践を行ってきたことで、担当教師の授業改善が促され、児童が自らの思いを広げて、表し方を工夫する姿がたくさん見られた（図23・図24・図25）。



図23 友達と対話をしながら自分の発想を広げる姿



図24 友達と対話をしながら作品のよさを見付ける姿



図25 友達と用具を試しながらつくり方を決める姿

5 振り返り

研究の事前、事後に担当教師6名を対象に、図画工作科の学習指導についてのアンケート及び、聞き取り調査を実施した結果は以下の通りである。各質問項目における記述は、12月のものである。

(○成果 ●課題)

質 問 項 目	評 価	
	7 月	12 月
① 児童は、創造的に自らの思いを広げ表している。 (児童の表現は多様になっているか、教師の指導によって児童の作品が画一的な表現に偏っていないか など)	2	3. 5
○児童の発想は想像以上に豊かで、児童に任せてみる大切さを知った。 ○児童の発想を広げる材料や絵本などの資料の準備をしておくことが大切と感じた。 ○友達の活動の様子や作品を見ながら製作できる指導が効果的であった。 ○「環境づくり」によって児童の作品が多様になり、教師の想定を超えるものが増えた。 ○市販の教材を使わなかったことで、児童の思いの広がりがそのまま作品として形になった。 ●児童の思いは多様であるが、それを表現する技能が足りていない児童がいると感じる。		
質 問 項 目	評 価	
	7 月	12 月
② 図画工作科の学習指導に、難しさを感じることもある。 (造形遊び・絵や立体、工作・鑑賞などの内容について、具体的な言葉かけ、指導、評価について など)	3. 5	3
○上手な作品に仕上げなければいけないという概念が消えた。 ○準備をしっかりして、環境を整えることが重要であると感じた。今まではやっていなかった。 ○教師自身で作品をつくってみることで活動が想定でき、児童がより力を発揮できると感じた。		

- イメージを膨らませる体験活動の場をつくることは、初めての実践であった。
- 教えすぎずに指導することの難しさを感じている。
- 全部、児童任せでもいけないと考える。教えるべきところと児童に任せるところを知りたい。
- 児童が自由に発想できる幅の広い題材においては、表したいことを生み出せない児童がいた。

質 問 項 目	評 価	
	7月	12月
③ 机・椅子の配置を変える、材料・用具置き場をつくるなどの図画工作科の「環境づくり」を意図的に行い、授業をしている。	1. 5	3. 17
<p>○ほんの少し机・椅子の配置を変えるだけの工夫でも、児童は主体的になると感じた。</p> <p>○教室の中に、材料や資料を増やすとよいと感じた。</p> <p>○自分の思いを一人で考える時間も大切と思うが、彩色や立体、工作の製作のときにはグループで活動をすると対話ができると感じた。</p> <p>○机の配置を向かい合わせにしたグループ活動では、児童同士で教え合う場面が増えた。</p> <p>○試しの場で彩色したり、木を切ったりする活動がよかった。試しなので、児童は積極的に発想を広げることができ、教師は児童の失敗を心配せずに賞賛できる場面が増えた。</p> <p>○教室内で自由に移動できる環境において、児童は主体的に鑑賞しながら製作できると感じた。</p> <p>○「かんきょう手帖」の「環境づくり」の図やイラストが分かりやすかった。</p> <p>●児童の実態もあり、指導が必要な場面も出てくるため、毎回はできないところもある。</p>		

6 検証

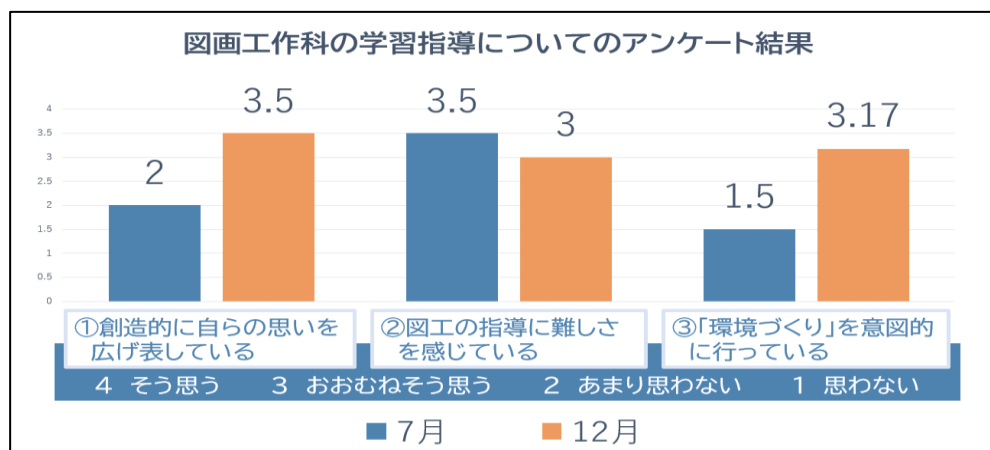


図26 図画工作科の学習指導についてのアンケート結果

図26の質問項目①「児童は創造的に自らの思いを広げ表している」において、1.5ポイントの増加が見られた。記述内容から、「環境づくり」によって児童の表現が多様になったと感じた教師が増えたと考える。質問項目②「図画工作科の学習指導に難しさを感じている」については、減少したものの0.5ポイントと僅かであり、学習指導の難しさの解決には、まだ課題があると考えられる。「これまで意識していなかった児童主体の学び方を知ったことで、難しさを感じるようになった」と答えた教師も2名おり、これは図画工作科の授業改善に向かったことから、新しい課題に直面した結果とも考察できる。質問項目③「図画工作科の『環境づくり』を意図的に行い、授業をしている」については、1.67ポイント増加し、記述内容からも主体的・対話的な学びに向かうことを実感できた教師は多かったと考える。担当教師は聞き取りの中で、「児童作品の形や色彩、表現の工夫が、例年以上に多様になった」と話していた（次ページ図27）。アンケートの記述より、教師の指導の変容によって、児童の表現の工夫がたくさん表れたと考えられる。このことから、児童の表現の多様性を大切にしたい授業改善ができたと考えられる。

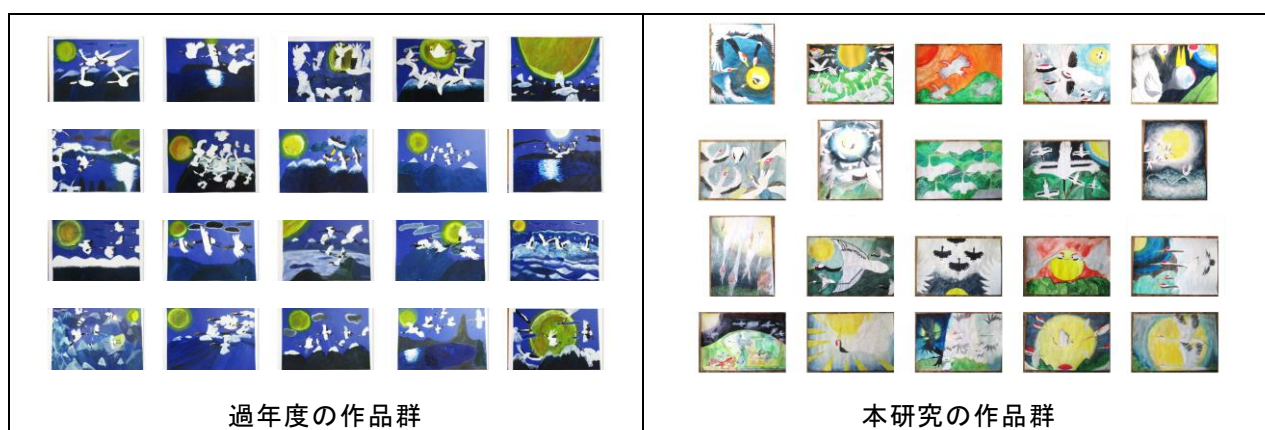


図27 過年度の作品群と本研究の作品群

担当教師は「環境づくり」を授業改善の視点とした示範授業の参観や、自らの授業実践を通して、図画工作科の学びについて理解を深めることができた。本研究の「体制づくり」によって図画工作科の学習指導について、教師間で日常的に話し合う機会を継続できたことにより、意識が少しずつ変わってきたと考える。「児童の発想は想像以上に豊かで、児童に任せてみることに大切さを知った」という担当教師の発言のように、児童の活動を肯定的に捉えたことから、教師主導の授業から児童主体の授業に変わってきたと考える。また、本研究において、一人一人のよさが十分に発揮できるような、「環境づくり」をし、児童に表し方を任せたことで、学校全体の作品群の表し方の工夫がより多様になった。このことから、児童の多様性を大切にしたい、授業改善を促すことができたと考える。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 「かんきょう手帖」を基に図画工作科の授業の「環境づくり」について話し合うことで、担当教師が児童の表現の多様性を大切にし、自己決定を促す指導ができるようになった。
- 学校全体の担当教師の授業改善により、児童の自己決定や自然な対話が促され、創造的に自らの思いを広げ表すことで、多様な表現の工夫をすることができた。

2 課題

- 「環境づくり」は、児童の主体的な姿を促す有効な手立てである。しかし担当教師の図画工作科の学習指導の考え方は、個々の授業観に根差すところがあり、短期間の変容は難しく、授業改善には時間を要するため、継続的な取組が必要である。

Ⅷ 提言

- 図画工作科の学習指導において、「環境づくり」に着目した教科経営を行うことで、学校全体の授業改善が促され、創造的に自らの思いを広げ表す児童を育成できると考える。
- 担当教師が、図画工作科の学習指導において、児童の表現の多様性を大切にし、自己決定を促す「環境づくり」のよさを実感し、活用できるようになるためには、「かんきょう手帖」を基にした授業実践が有効である。

<参考文献>

- ・文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 図画工作編』

<担当指導主事>

豊岡 大画 福島 純子